

青少年育成センターだより

第一〇二号

二〇二一・一・一発行

第九十九号で「お母さんの宝物」という話を紹介しました。今回も東井義雄先生の本から選んでみました。長い文章で、裏面もあります。

それがお母さんでした

長崎に、原子爆弾が落ちました時、当時、十歳であった荻野美智子ちゃんという女の子の作文をちょっと聞いてください。

「雲もなく、からりと晴れたその日であった。私たち兄弟は、家の二階で、ままごとをして遊んでいた。お母さんは島へなすを挽ぎに行った。出かけに、十一時になったら、ひちりんに火をおこさないよ、といいつけて行った。けれども、私たちは遊びが面白いので、時計が十一時になったのに、一人も腰を上げず、やっぱりままごとに夢中になっていた。

その時、ピカリと稲妻が走った。あつという時はもう家の下敷きになって、身動き一つできなかった。何とかして出ようとすればするほど苦しくなる。じつと外の様子をうかがうより仕方がなかった。二人の姉の姿が外に見えた。

大喜びで『助けて、助けて』とわめいた。姉たちは、すぐ走り寄って来て、私を助け出そうとした。しかし土壁の小舞の組んだのが間をさえぎっていて、押しても引いてもものけられなかった。

大きい姉が、『我慢しろ。ねえ、もうじきお母ちゃんもお父ちゃんも帰ってくるけんね。姉ちゃんは誰か呼んでくるけんね』と励ましておいて、向こうへ走って行った。私は、縦横に組んだ小舞いの隙間から、わずかばかり見えてる外を、必死に見つめて、お母ちゃんが来るかお父ちゃんが来るかとまっていた。

やがて、大きい姉ちゃんが、水兵さんを四、五人連れて走ってきた。その人々の力で、私は助け出された。フラフラよろめき、防空壕のほうへ行こうとした。家の下から、助けてえ助けてえと叫ぶ声が洩れてきた。弟の声であった。大きい姉ちゃんが一番先に気付いて、沢山の瓦を取りのけて、弟を引き出した。

その時、また向こうのほうで、小さな子の泣き声が洩れてきた。それは二つになる妹が、家の下敷きになっているのであった。急いで行ってみると、妹は大きな梁に足を挟まれて、泣き狂っている。四、五人の水兵さんが、みんな力を合わせて、それを取りのけようとしたが、梁は四本つづきの大きなもので、びくともしない。挟まれている足が痛いので妹が両手をばたつかせて泣きもがいている。

水兵さんたちは、もうこれはダメだといい出した。よその人が水兵さんたちの加勢を頼みに来たので、水兵さんたちは向こうへ走って行ってしまった。

お母さんは何をまごまごしてるんだろう、早く早く帰ってください。妹の足がちぎれてしまうのに。私はすっかり困ってしまい、ただ背伸びして、あたりを見まわしているばかりだった。

その時、向こうから矢のように走って来る人が目についた。頭の髪の毛が乱れている。女の人の裸らしい。むらさきの体。大きな声を掛けて、私たちに呼びかけた。ああ、それがお母さんでした。

『お母ちゃん。』

私たちも大声で呼んだ。あちこちで、火の手が上がり始めた。隣のおじさんがどこからか現れて、妹の足を挟んでいる梁を取りのけようと、うんうんカんでみたけど、梁はやっぱり動かない。おじさんはがっかりしたように大きい溜息をついて『あきらめんばしかたのなか』いかにも申し訳けなさそうにいつて、おじぎをしてから向こうへ行ってしまった。

火がすぐ近くで燃えあがった。お母さんの顔が真青に変わった。お母さんは小さい妹を見下ろしている。妹の小さい目が下から見上げている。お母さんは、ずっと目を動かして、梁の重なり方をみまわした。

やがて、わずかな隙間に身を入れ、一ヶ所を右肩にあて、下くちびるをうんとかみしめると、うううーと全身に力を込めた。パリパリと音がして、梁が浮きあがった。妹の足がはずれた。大きい姉さんが妹をすぐに引き出した。お母さんも飛びあがって来た。そして、妹を胸にかたく抱き締めた。

しばらくしてから思い出したように私たちは、大声をあげて泣き始めた。お母さんはその声を聞くと、気がぬけたのか、そのままそこへ、へなへなと腰をおろしてしまった。お母さんはなすをもいでいる時、爆弾にやられたのだ。上着ももんべも焼き切れちぎれ飛び、ほとんど裸になっていた。髪の毛はパーマネントウェーブをかけすぎたように赤く縮れていた。体中の皮は大火傷で、じゅるじゅるになっていた。さっき梁を担いで押し上げた右肩のところだけ皮がペロリと剥けて、肉が現れ、赤い血がしきりににじみ出ていた。お母さんはぐったりとなって倒れた。お母さんは苦しみはじめ、悶え悶えてその晩死にました」

これは、特別力持ちのお母さんだったでしょうか。四人も五人もの水兵さんが、力を合わせても、びくともしないものを動かす、力持ちのお母さんだったでしょうか。皆さんのお母さんも皆さんがこのようにならうとせずにはおれない。しかもこの力が出てくださるのがお母さんという方なのです。

「自分を育てるのは自分」東井義雄 著

お母さんって偉大ですね。ぜひ、子どもたちにこの話を読ませてください。幼い子であれば、お母さん自ら読んでやってください。より心に沁みるのではないでしょう。

【文責】 青少年育成センター指導員 藤村

【問合せ】 防府市教育委員会生涯学習課（☎ 〇八三五―二三―三〇一三）